

桐生市議会 令和6年度 公明クラブ 政務活動費 視察研修会等 報告書

- (1) 日 時: 令和6年6月26日(水) 9時30分 ～ 11時
- (2) 視察先: ・ 学校法人角川ドワンゴ学園・S 高等学校
- (3) 場 所: 〒300-4204
茨城県つくば市作谷 587-2
- (4) 内 容: 角川ドワンゴ学園が本市に開校するにあたっての経済効果など。
- (5) 参加者: 丹羽孝志 山之内肇

◎視察内容

学校法人 角川ドワンゴ学園について

N・S 高等学校 校長補佐 鳩英昌 様
S 高等学校 副校長 福田典仁 様
スクーリング運営部 主幹 小森嵩也 様

引き続き、本日は昨日得た角川ドワンゴ学園が開校した事による経済効果などの知見を根底に置いた視察を、茨城県・つくば市にある S 高等学校でも行なってもらいました。

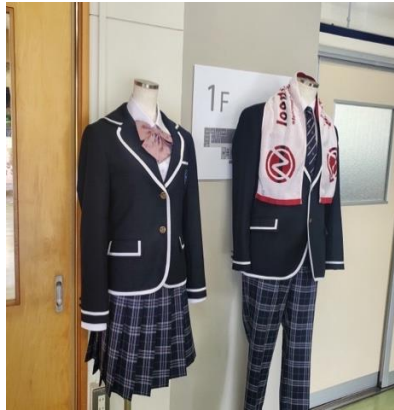
S 高等学校の開校は2年前の 2021 年 4 月でしたが、観光地要素の高い沖縄にある N 高等学校とはまた違って S 高等学校は歴史ある自然と最先端技術の趣が感じられる学園でした。

学園のあるつくば市は万葉集にも歌われている筑波山の麓に広がる神話と未来が交差する学園都市で、駅周辺には筑波大学や宇宙航空研究開発機構 J A X A(ジャクサ)をはじめとした教育・研究施設があり、“科学技術の地の街”としても国内外から注目されている。一方「西に富士、東に筑波」と称される標高877m の筑波山は、関東平野を見下ろすかのように凜とした佇まいを誇っており、朝夕に山肌の色を変えることから“紫峰”(しほう)と呼ばれ人々に愛され続けている。

そんなつくば市に、角川ドワンゴ学園の本校 2 校目ができたわけですが、校長補佐・鳩様からは、学園の概要や S 高等学校のレクチャー及び多くの質疑応答(Q &A)をいただき、その後、副校長・福田様と主幹・小森様を交えて校内を丁寧に案内して頂きました。



レクチャとしましては、昨日伺った内容を更に深くなぞるようにご教授頂き、また、質疑応答・Q & A に関しては、私どもの多くの疑問点に的確にお答え頂きました。また、校内案内に関しては、ちょうど生徒さんがスクーリングの授業を行っており、その様子や雰囲気を観察することができました。



◎ 質疑応答・Q&A

Q1:群馬県桐生市に来年度開校予定のR高等学校に関して、数ある自治体の候補地の中で、どうして桐生市を選んでいただいたのか？

A1: まず、生徒数が増加し続けている状況の中、3つ目の校舎を持つ必要性があり、いくつかの自治体（中部、東海、関西、関東）を回っていた。その中で、群馬県桐生市が1番熱心に校舎を紹介してくれ積極的に相談に乗ってくださった。また、校舎自体の立地や環境も良く、校舎もすごく良い状況で綺麗で風情があったので、そこが決め手となって採用させていただいた。

Q2:ドワンゴ学園の学園の理念や生徒に期待している事は？

A2:ドワンゴ学園の名前の名称にはN・Sといったものを付けており、学校が生徒の考えとか生徒の行動を縛るという事はしたくないので、頭にあえて学校自らが生徒を縛るような考えを持った名称をつけてはいない。NやSといったアルファベット一文字をつけたのは、生徒がその意味をそれぞれ考えるため、生徒は、自分のやりたい事を見つけ、目指したいものを追求して頂きたく、それを学校が支援し運営している。したがって、教育の理念としても、生徒がやりたいこと、なりたいものに対して、学校はどれだけ支援できるかというスタンスでいるが、それは生徒に対しての迎合ではなく、社会の厳しさは指導していく。

Q3:教育に関しては、N校とS校といった特色の違いはあるのか？また桐生市はR校ですが、桐生市の特

色はどの様なものと考えているのか？

A3: 基本的にN校もS校も学べる教育コンテンツのネット学習や部活動や課外活動は全て一緒に、違いは本校でのスクーリング。例えばN校は沖縄で非日常を体験する。そうしたN校やS校での地域の文化や歴史に触れていただくことが各本校での違い。そういうことで、R校である桐生市の歴史文化と言うものを体験していただきたくスクーリングのプログラムを考えており、桐生市では織物の体験とか八木節を教えたい。非日常の体験とはこういう体験のことです。



Q4: 本市・桐生市にR校ができる事に対して、全面的に応援をして頂きたいと考えているが、それに対して何か要望などございますか？

A4: 校舎を探す中などで、桐生市さんに本当に一生懸命に相談に乗っていただいて感謝している。予定通りに許可を得て学校を開校したいと考えおり、生徒に関してはスクーリングを通して桐生市を知り、今まで味わえなかった体験をして頂きたい。そこでの感動と言うのは忘れないと思っており、そうした生徒は卒業後も戻ってくる。実際に沖縄にもつくばにも来ている。経済的にも持続的な地域貢献など、何かお手伝いできるのではないかと考えており、せっかく高校を開講させていただけるということであれば、そういうところにも貢献させていただきたいと思っていますのでぜひ応援をお願いいたします。

また、実際の経済効果として、一点、スクーリングの宿泊施設に関して申し上げれば、スクーリングの参加人数は、S校の12,000人ぐらいの定員で、1日約150人スクーリングに来ているが、これが入学時期と卒業の時期と夏休み正月と抜くと大体35週に渡って来る事になり、今後、定員が20000人になっていけば、スクーリング参加者は1日200名程で35週で7000人が来る事になる。

地元での宿泊や食事をするスタンスをお願いしているが、桐生市には、なかなか大きなホテルがない。理想としては、1回で200人ぐらいの生徒が宿泊できる場所があればいいと思っている。

当面は桐生駅の前にビジネスホテルや市内ホテルを当面は、使わせていただきたいと考えているが、できれば200名宿泊できる場所が、どこかのタイミングでできればすごくありがたいと思っておりますが、1つの部屋で、6人ぐらい一緒に泊まれるところが理想であります。

Q5: ドワンゴ学園で宿泊場を立てる事は考えているのか？

A5: 我々が宿泊所を建ててお金を取るというのは、地元還元できなくなるのでそれはしない。それにホテ

ル運営まで考えていくとなるとそれは大変なので、生徒の指導に集中したいと考えている。ちなみにドワンゴ学園は、生徒のメンタルだけに対応している先生、勉強だけに対応している先生、スクーリングだけに対応している先生、課題だけに対応している先生といった分業制になっている。



Q6:ドワンゴ学園の経営は支出に合っているのか？

A6:現在は正直言って合っていない。登記簿にも出ているが、すごい赤字である。ただ、それでも親会社の(株)角川が資金を援助していただいている、子供たちにとって必要なことをやろうというスタンスでやっている。徐々に生徒数が増えることによって、支出は改善していくのではないかと考えており、今、順調に計画通りに来ている。

Q7:ゆくゆくは卒業生が社会に対する何か貢献を行っていく事は考えているのか？

A7:やってほしいと思っている。OB会ということでゆるい集まりは生徒から手が上がって存在しているが、まだ回っていないのが実情です。

Q8:今後の展望の中で大学を作る予定はあるのか。

A8:株式会社ドワンゴと日本財団とで提携した一般社団法人を作り、完全インターネット大学設置の申請中(Z E N大学)で、N・S校卒業生の中で、そういう大学に行きたいと言う子の進路先の1つになる予定です。

Q9:地元のつくば市さんとのやりとりの中で、日常的に行政とのやりとりはあるのか？(開講後も頻繁にやりとりをする事はあるのか？)

A9:定期的に我々のタイミングで事業運営の報告はしているが、行政側の方からは用事がなければ来ない。また、沖縄県うるま市と茨城県・つくば市とは、提携事業を行っていて、沖縄県・うるま市では、我々がコンテンツを作って、離島をつないで他の学校の人たちと学習なり遊ぶなりをしようとしている。また、茨城県とは企業間養成プログラムを一緒にやっており、学園生徒や他校の生徒をエントリ

一して企業や研究部とか、茨城で認可された企業とドワンゴの企業と一緒にやっている。群馬県・桐生市とは、デジタルクリエイティブ人材養成拠点“ツクルンキリユウ”とのタイアップをしていく話がある。関係官庁としての行政よりは、一緒に事業をやっていく行政関係の方がやりとりが多い。つくば市では商業観光交流課と交流をしている。具体的な学校授業と行政とのやりとりで、職業体験では、マタギや船を作りに行くことを行っている。桐生市とは先行して商工会と話し合っコンテンツを作っている。



◎所感及び当局への要望

本市・桐生市に角川ドワンゴ学園 R 高等学校が来年(R7年度)に開校するにあたり、本市の経済にとってどのような影響が起こってくるのかを現在開校されている N・S 高等学校の現状の課題と今後の取り組みを知る事により、本市の R 高等学校への受け入れ対応の強化を図って頂きたいという思いでおりますが、当局におかれましては今回の視察で知り得た情報をお伝えする中で、その対応をして頂きたいと考えております。

質疑応答・Q & Aにおきまして、地元・桐生市民には分かりづらい風情や魅力が本市にはあると言うことが認識でき、本市の織物や八木節という歴史や文化は言葉だけのお世辞でなく、非常に価値のある優れたものであり、生徒の心に深く刻まれると思われ、実際にR高等学校が開校する事によりそのことが証明されたと感じ、また、そうしたことは、本市の環境がドワンゴ学園の教育理念(生徒自身が欲し、成し遂げたいと思うことを支援する。)を行う環境にも適しているとも思いました。

このような学園が本市に開校させるにあたっての要望の第一としましては、やはりスクーリングでの宿泊所の確保であり、本市としてはもう既に認識し取り掛かっているとは思いますが、是非とも学園側の要望に沿った宿泊所の確保をお願いしたいと考えます。

学園では、1日200名のスクーリング受講者（宿泊者）が宿泊できる場所の確保が理想であると言われており、3泊4日で1年・52週間のうち35週間が使用されるということで、宿泊料金を想定し計算をしても経営的にも魅力的な数字になると思われ、その他の17週間においても交流人口（きりゅう祭りなど観光イベント）の宿泊先としても考えていけるのではないかと考えます。

そうしたことから、宿泊施設に仮に行政が携わるのであれば、例えば桐生駅・北南周辺・公有地を活用した公民連携事業における宿泊施設などを含んだ若者が賑わう複合施設建設の構想などを考えいくというのはどうかと考えております。

やはり、中心駅周辺は市の玄関窓口とも言われており、そこを若者が賑わう場所とすることは地域経済の活性化につながると思いますので、中心駅周辺の整備を考えることは大切だと思われれます。

いずれにしても、こうしたことが功を奏すれば、生徒たちにとって、より快適なスクーリングとなり、生徒たちの満足度が上がり、桐生市に好印象がもたらされると考えます。

そして、スクーリング参加という一時的な交流人口が、関係人口へと変化していくと考えますので、研究をして頂きたく要望いたします。

以上